

# 東北地方における山下りんのイコン

## フィールドワーク調査による正教会の状況と山下りん作イコンの所蔵概要

久保田菜穂

### はじめに

山下りん（1857～1939）とは何者か。日本の幕府政治が終わり新たな国の形をつくっていく真っ最中であつた明治初期の激動の時代を生きた日本人女性である。現在の茨城県笠間市に生まれ、生来絵を描くことを好んだ山下りんは、絵の師匠がいない笠間から飛び出し、徒歩で上京し様々な絵師のもとを転々とする生活を送った。そして、当時の政府が作った工部美術学校に初めて入学する女子学生の1人となった。さらに彼女は、日本人女性として初めてヨーロッパに留学し絵画を学んだ人物でもある。ただし、この留学は少々特殊な形をとっていた。留学先はロシアの修道院であり、そこに山下りんを送り出したのは、日本に正教を布教した、のちの大主教ニコライだった。

ニコライと山下りんは、工部美術学校に山下りんと同時期に入学した山室政子を通じて出会った。もともとニコライは山室政子にイコンを学ばせるためにロシア留学させるつもりだったのだが、ニコライがロシアにいったん帰国してから日本に戻ってきたときには山室は結婚をし、絵の修行にヨーロッパに行くような状況ではなかった。その代わりに、山下りんが海を渡ることになった。

ニコライが山下りんに望んでいたのは、正教の信仰生活を送るのに欠かせない「イコン」と呼ばれる宗教画を描くことだった。日本正教会を作ろうとしていたニコライは、イコン画家も日本から輩出されることを願っていた。しかし、この時点で、山下りんとニコライの考えに齟齬があつたことがその後の山下りんの留学生活からわかる。山下りんは熱心な正教徒というわけではなかった。ただ、何よりも絵が好きで一人の女学生だった。工部美術学校ではフォンタネージが教鞭をとり、西洋画を教えていた。そこで、山下りんが学びたかったのはラファエロの絵のような王道の西洋絵画の技法だった。これをヨーロッパの地で直接学ぶことができると考えた山下りんは、ニコライから留学話を聞いたとき心が躍るようだっただろう。しかし、実際に修道院で要求されたのはイコンという「オバケ絵」と山下りんが呼んだ絵だった。それは、遠近法を使わず陰影もつけない、平面的に人物を描くような絵だった。エルミタージュ美術館でラファエロらのイタリア絵画に触れ、模写する機会を得ても、美術館通いは不信仰の表れと見なされて通う

のを禁止されてしまう。自分が描きたい絵を描くことを禁じられ欲求不満に陥り、修道女たちの絵を見下すような態度を取ってしまう山下りんは修道院内での人間関係もうまく行かずに嫌がらせを受け、指導を受けていた修道女とも衝突した。精神的に追い詰められ、体調も崩し、山下りんは5年間の留学予定を2年に切り上げて帰ってきてしまう。

その後、山下りんはニコライのもとに戻り、アトリエを東京神田の正教会の敷地内に構えるが、一度正教会を離れ銅版画などの製作を行なっている。そして7年後に再び正教会に戻り、イコンを書いた。ニコライが死去し、1918年に帰郷した。晩年は白内障の影響もあつたか作品を描くことはなかった。

山下りんの制作したイコンは全国各地の教会に残っているが、全国を比較してみると東北地方に多いことがわかった。また、山下りんのイコンがイコンスタスに使用されている事例も東北地方の教会に多い。本論文では、以下の3つの目的をもって論じていく。

- ①山下りん作のイコンが東北地方に多い理由や背景を明らかにすること
- ②山下りん作のイコンが使用されているイコンスタスの特徴を明らかにすること
- ③現在残っている山下りん作のイコンの記録を残すこと

イコンは美術作品として保存されるものではなく、信仰の道具として使用されるため、古くなり使えなくなれば消失していく。現在の記録を残しておくことで今後の研究の役に立つことを願う。本論文では、記録を残すことに重点を置き、本編と資料編の二本立ての構成とした。論文集の原稿作成にあたって、資料編の大部分は割愛した。調査にあたって、山下りん作のイコンが残っているとされる東北地方の教会を実際に訪れ、どこに何があるかを記録し、その土地の神父や信徒に話を聞きながら情報をまとめた。また、正教会公認の雑誌だった「正教新報」や先行研究に基づく文献調査を行なった。「正教新報」に基づく調査内容は山下りん作イコンに関する新たな発見がなかったため割愛した。

本論文に掲載した各教会の外観やイコンの写真は、特に断りがない限り筆者の撮影によるものである。

## 第1章 東北地方の山下りん作イコン

日本正教会ホームページ「山下りん聖像所蔵教会一覧表」<sup>1)</sup>によると、日本全国の正教会の中でも山下りん作イコンが所蔵されているとされる教会は、全部で38教会である。その中で東北地方には12教会が山下りん作イコンを所蔵しているとされている。以下の表は、上記の一覧表を参考にして、作成したものである。

北海道(8)	山下作イコンあり(6)	上武佐ハリストス正教会、釧路ハリストス正教会、札幌ハリストス正教会、函館ハリストス正教会、上磯ハリストス正教会、小樽ハリストス正教会
	なし(2)	斜里ハリストス正教会、苫小牧ハリストス正教会
東北(22)	山下作イコンあり(12)	北鹿ハリストス正教会、盛岡ハリストス正教会、山田ハリストス正教会、盛ハリストス正教会、一関ハリストス正教会、岩谷堂ハリストス正教会、高清水ハリストス正教会、金成ハリストス正教会、石巻ハリストス正教会、上下堤ハリストス正教会、仙台ハリストス正教会、白河ハリストス正教会

	なし(10)	福島ハリストス正教会、佐沼ハリストス正教会、浦谷ハリストス正教会、気仙沼ハリストス正教会、曾慶ハリストス正教会、奥玉ハリストス正教会、十文字ハリストス正教会、大原ハリストス正教会、日形ハリストス正教会、遠野ハリストス正教会
関東(17)	山下作アイコンあり(7)	足利ハリストス正教会、鹿沼ハリストス正教会、高崎ハリストス正教会、須川ハリストス正教会、須賀ハリストス正教会、手賀ハリストス正教
	なし(10)	山手ハリストス正教会、垓ハリストス正教会、平塚ハリストス正教会、水戸ハリストス正教会、馬頭ハリストス正教会、横浜ハリストス正教会、前橋ハリストス正教会、宇都宮ハリストス正教会、小田原ハリストス正教会、柏久保ハリストス正教会
中部(7)	山下作アイコンあり(7)	修善寺ハリストス正教会、静岡ハリストス正教会、柏久保ハリストス正教会、浜松ハリストス正教会、名古屋ハリストス正教会、半田ハリストス正教会、豊橋ハリストス正教会
	なし(0)	
近畿(4)	山下作アイコンあり(3)	大阪ハリストス正教会、京都ハリストス正教会、神戸ハリストス正教会
	なし(1)	和歌山ハリストス正教会
中国(2)	山下作アイコンあり(1)	人吉ハリストス正教会
	なし(1)	広島ハリストス正教会
四国(3)	山下作アイコンあり(1)	人吉ハリストス正教会
	なし(2)	徳島ハリストス正教会、高松ハリストス正教会
九州(4)	山下作アイコンあり(1)	柳井原ハリストス正教会
	なし(3)	九州北部ハリストス正教会、鹿児島ハリストス正教会、熊本ハリストス正教会

本論文の調査中に、実際に各地の教会に訪問して以下の2点のことが明らかになった。

1点目は表中に記載されている山田ハリストス正教会に関することだ。山田ハリストス正教会は2011年3月11日の東日本大震災の際に津波と火災に巻き込まれ、聖堂やアイコンが焼失した。その際に、山下りん作アイコン2点も焼失してしまったそうだ。そのため、実際に山下りん作アイコンは残っておらず、今回の調査では足を運んでいない。

2点目は中新田ハリストス正教会についてだ。中新田ハリストス正教会は、この一覧表には記載がない。しかし、2016年7月から10月にかけてウラジオストクで開催された山下りんの展覧会に、中新田ハリストス正教会所蔵の山下りん作のアイコンが出品されており、中新田ハリストス正教会が山下りん作アイコンを所蔵していることがわかった。これらのことから、2016年10月において、東北地方における山下りん作アイコンの所蔵教会は、以下の12教会である。各教会の場所については、図1を参照。

東北(12)	北鹿ハリストス正教会、盛岡ハリストス正教会、盛ハリストス正教会、一関ハリストス正教会、岩谷堂ハリストス正教会、高清水ハリストス正教会、金成ハリストス正教会、石巻ハリストス正教会、上下堤ハリストス正教会、仙台ハリストス正教会、白河ハリストス正教会、中新田ハリストス正教会
--------	--



図1 東北12教会の位置

アイコンはその所在の管理が曖昧なため、現在どこに何のアイコンがあるかという正確な情報を手に入れることは難しい。さらに、アイコンは教会だけに置いてあるわけではなく、信徒の家に置かれていたり、持ち歩くことが可能な小型のものがあったりする。例に漏れず、山下りんのアイコンについても、個人的なついで贈られたものを個人が所蔵していることがある。本論文では、教会が所蔵しているアイコンに限定して調査した。そして、山下りん作アイコンを所蔵している教会数が多く、作品数も多い東北地方に焦点を絞って調査を進めた。

東北地方に山下りん作アイコンが多い理由として推測されるのは以下のことである。明治初期、カトリックやプロテスタントは都市部のエリートを中心に宣教を進めていった。正教においても、最初こそ学のあるエリート層が伝道された。ただし、カトリックやプロテスタントと違うのは、初期に伝道された者たちが自分の故郷に帰って、農村での宣教活動を活発に行なった<sup>iii</sup>ことだ。東北地方は、特にその傾向が強かった。

農民たちは経済的に貧しく、献金の額はカトリックやプロテスタントと比べて少額だった。そのため、正教の信仰生活を送る上で必要なアイコンを確保するためとはいえ、ロシア製の高価なアイコンを輸入して取り寄せることは難しかった。その中で、日本人アイコン画家である山下りん作のアイコンは輸入に要する費用がらず、格式高いロシア製のアイコンよりは廉価で購入することができた。そのため、山下りん作アイコンを設置する教会が多くなり、今日でもそのアイコンが残されていると考えられる。

仙台ハリストス正教会の主教や、東京・神田にあるニコライ堂で出会った信徒の話聞いたところ、山下りん作アイコンを所蔵しているのは地方のお金がない教会だろうということだった。比較的規模の大きい教会は格式を大事にするからか、ロシア製の立派なアイコンがあることが誇りらしい。

本論文の調査にあたって、各地の教会を訪問した。東北地方の正教会は農村部にあるところが多く、公共交通機関で訪ねるには苦勞する教会もあった。そのような土地に教会が立てられた経緯を繙いていくことができたのも今回の調査の面白さだと感じる。はじめに調査の行程を記しておく。

2015年夏、ニコライ堂（東京都千代田区神田駿河台4-1-3）と山下りん記念館（茨城県笠間市笠間1510）を訪ねる。観光地の顔を持つニコライ堂は一般の人々にも開放され活気づいた雰囲気だった。今となっては改めて思うが、東北地方のシンプルなイコノスタスとは違い、ニコライ堂のイコノスタスには風格を感じさせる装飾やロシア製アイコンの壮大さがあった。また、山下りん記念館を訪ねると、アイコンに限らない彼女が描いたイラストや日本画などを見ながら、山下りんが送った生涯を想像することができた。さらに、2015年7月25日、私が最初に訪れた東北地方の教会は、高清水ハリストス正教会であったが、神父や信徒の方々の心の温かさを感じる訪問となり、今後の調査に向けて弾みがつくようなスタートをきることができた。

その後、2015年秋から年末にかけて、雪が降る前に各地の教会を訪問した。北鹿、白河、一関、盛、盛岡、岩谷堂、金成、石巻、上下堤のハリストス正教会に訪問した。仙台教会には年が明けてから訪問し、地方の教会とはまた違う雰囲気に少し面食らってしまった。

そして、2016年の初夏には、西日本にある正教会にも足を伸ばすことができた。徳島、大阪、京都、神戸のハリストス正教会はそれぞれの教会が持つイコノスタスが東北地方とはまた違うものであり、今回の調査に新たな視点を与えてくれた。

第1章では現地調査に基づく山下りん作アイコンを所蔵する東北地方の各教会の経緯と所蔵しているアイコンにまつわる経緯を述べたが、研究論文集においては各教会の詳細な沿革や現状については割愛した。なお、8. 中新田ハリストス正教会と 11. 仙台ハリストス正教会については割愛した。前者には訪問しておらず、後者については山下作のアイコンが確認できなかったためである。12 教会の外観とイコノスタスの概観は次表を参照。

<p>1.北鹿ハリストス正教会</p>	
<p>〒 018-5603 秋田県大館市曲田 80-1</p>	
	
<p>2.盛岡ハリストス正教会</p>	
<p>〒 020-0114 岩手県盛岡市高松 1 丁目 2-14</p>	
	
<p>3.岩谷堂ハリストス正教会</p>	
<p>〒 023-1121 岩手県江刺市男石 1-79</p>	
	
<p>4.盛ハリストス正教会</p>	
<p>〒 022-0003 岩手県大船渡市盛町字町 1-2</p>	
	

5.一関ハリストス正教会	
〒 021-0902 岩手県一関市萩荘箱清水 56-1	
	
6.金成ハリストス正教会	
〒 989-5155 宮城県栗原市金成上町西裏 60-1	
	
7.高清水ハリストス正教会 <sup>iv</sup>	
〒 987-2133 宮城県栗原郡高清水町桜丁 37	
	
8.中新田ハリストス正教会 <sup>v</sup>	
〒981-4241 宮城県加美郡加美町南町 137	
	

9.石巻ハリストス正教会	
〒 986-0827 宮城県石巻市千石町 4-10	
	
10.上下堤ハリストス正教会	
〒 981-0305 宮城県東松島市上下堤字磯田沢 78	
	
11.仙台ハリストス正教会 <sup>vi</sup>	
〒 980-0021 宮城県仙台市青葉区中央 3-4-20	
	
12.白河ハリストス正教会	
〒 961-0942 福島県白河市愛宕町 50	
	



## 第2章 山下りん作アイコンが使用されているイコノスタス

東北地方における山下りん作アイコン所蔵教会については資料編 2 の東北地方の山下りん作アイコン所蔵教会一覧表を参照。また、各教会の山下りん作アイコンについては資料編 3 を参照。各教会のアイコンはイコノスタスに使用されているものもあれば、聖堂や信徒の集会所の壁に飾られていたり、至聖所内に配置されていたりするものもある。

この章では、東北地方において、イコノスタスに山下りん作のアイコンが使用されている教会について述べる。イコノスタスに山下りん作のアイコンが使用されている教会とイコノスタスに使用されているアイコンの個数は以下の通りである。

教会名	所蔵されている山下作アイコンの総数	イコノスタスに使用されている山下作アイコンの数
1.北鹿ハリストス正教会	15	12
2.盛岡ハリストス正教会	12 <sup>vii</sup>	10
3.岩谷堂ハリストス正教会	2	2
4.盛ハリストス正教会	8	6
5.一関ハリストス正教会	24	6
6.金成ハリストス正教会	2	-
7.高清水ハリストス正教会	9	9
8.中新田ハリストス正教会	不明 <sup>viii</sup>	-
9.石巻ハリストス正教会	2	-
10.上下堤ハリストス正教会	3	-
11.仙台ハリストス正教会	2 <sup>ix</sup>	-
12.白河ハリストス正教会	8	5

東北地方において、山下りん作アイコンがイコノスタスにかけられている教会は、北鹿、盛岡、岩谷堂、盛、一関、高清水、白河の 7 教会である。この章ではこの 7 教会に注目し、イコノスタスの中でアイコンがどのように配置されているかを確認する。図の中で丸付き数字は以下の通りにアイコンの主題を表す。さらに、丸付き数字の隣に※印がついているものは、山下りんの作品ではないアイコンである。

- ①機密の晚餐
- ②四福音記者
- ③生神女福音のガウリイル
- ④生神女福音のマリヤ
- ⑤ハリストス
- ⑥至聖生神女マリヤ
- ⑦神使首ガウリイル
- ⑧神使首ミハイル

## 1.北鹿教会

北鹿教会のイコノスタスのアイコンの並びは以下の図を参照。

		セラフィム	①		ラファエル		
降誕祭	⑦	⑥	③	④	⑤	⑧	神現祭
			②				

北鹿教会のイコノスタスは、すべて山下りんのアイコンによって構成されている。二段組のイコノスタスである。北鹿教会のイコノスタスは、山下がロシア留学から帰国し、アイコン制作を始めた初期に制作された。山下自身はこの教会を訪れた記録はないが、手紙によって、イコノスタスに配置するアイコンの位置を指示したと故・釜谷司祭はおっしゃっていた。

このイコノスタスにおけるアイコンの配置は、ロシアにおけるイコノスタスの配置の基本的な位置を踏襲していると言える。ただし、上段の『セラフィム』と『ラファエル』のアイコンは、常にイコノスタスに必要とされるアイコンではない。ただし、最上段中央のアイコンの両横にアイコンを配置することは、主題を問わなければ他の教会でも見られる。ちなみに、神田の東京復活大聖堂においては、イコノスタスの奥の壁のイコノスタスより高い位置に、3つのアイコンがかけられている。その3つのアイコンは、『ハリストス』を中心に天使が両横に並んでおり、この北鹿教会の『セラフィム』と『ラファエル』の位置関係が連想させられる。

ただし、『ハリストス』が中心ではなく、『機密の晩餐』が中心なのは北鹿教会の会堂自体はそんなに天井が高くないため、『機密の晩餐』の上部にもう一段アイコンを並べることはできなかったのではないかと考えた。

## 2.盛岡教会

盛岡教会のイコノスタスのアイコンの配置は以下の図を参照。

			至聖三者※				
十二大祭のうちの4つ※			①		十二大祭のうちの4つ※		
神現祭	⑦	⑥	③	④	⑤	⑧	復活
			②				

盛岡教会のイコノスタスは3段組のイコノスタスである。東北の教会において、3段組のアイコンは数が少ない。ある程度天井が高い盛岡教会だからこそその3段組とも言えるだろう。イコノスタスは天井まで届いており、向こうの壁を見ることはできない。盛岡教会においても、配置は基本的なイコノスタスの配置と変わらない。北鹿教会よりも後にアイコンが制作されたと考えられることから、北鹿教会で使用された配置を踏襲したのかもしれないと考えられる。山下が配置を指示したという記録は残っていないが、そうした可能性はかなり高いだろう。

### 3.岩谷堂教会

盛教会のイコノスタスのイコンの配置は以下の図を参照。

		① ※			
ニコライ※				不明※	
ミラリキ	⑥※	③	④	⑤※	不明※
ヤのニコライ※		② ※			

岩谷堂教会のイコノスタスは、日本製のものではない。イコノスタス自体は、装飾の一部が壊れていたり、もともと金色の塗料で塗られていたかと思わせるように色がはげている感じが出ていたりする。とても古いものであることが見てわかる。このイコノスタスにかけられている山下りん作のイコンは2点だけで、他のイコンは例によって作者不明である。王門にかけられたイコノスタスの位置は基本的な配置を踏襲している。ただし、岩谷堂教会のイコノスタスは横幅が短く、天使がかけられるはずの生神女とハリストスの隣にはミラリキヤのニコライのイコンと、主題は不明だが手に持つ十字架と衣装から殉教者といえる人物のイコンがかけられている。岩谷堂教会のイコノスタスは先にイコノスタスがあり、あとから山下りんのイコンがかけられたのではないだろうか。

山下作のイコン2点『生神女福音のマリヤ』と『生神女福音のガウリイル』は修復が施されたようで、真新しい絵の具で重ね塗りされているような感じだった。修復は技術の高い職人のような人物が行なったというわけではないようで、陰影は無視され、絵の具をベタ塗りしたような印象を受ける。実際に神父の奥様によると、修復の依頼を教会から出してはいないと思うので、信徒の誰かが修復をしてくれたのかもしれないということだった。

### 4.盛教会

盛教会のイコノスタスのイコンの配置は以下の図を参照。

		①					
		②					
主の洗礼 ※	⑦	⑥	③※	④※	⑤	⑧	主の昇天 ※
			②				

盛教会のイコノスタスはところどころに山下のイコンではないイコンが混ざっている。『生神女福音のガウリイル』と『生神女福音のマリヤ』はビザンティン様式のイコンであり、まわりの山下作のイコンとは全く雰囲気が違うため、浮いて見えるようだ。このことから見ても、いかに山下がアカデミックなイコン、つまりは西洋画の影響をかなり受けたイコンを書いたかがわかる。さらに、山下の描く顔はそんなに彫りが深くなく、日本人が親しみやすいような雰囲気であるため、ビザンティン様式のイコンと並べると、一層違和感が際立つ。

そして、今まで紹介した北鹿教会や盛岡教会との違いは、『四福音記者』のイコンの間に『生神女福音のガウリイル』と『生神女福音のマリヤ』のイコンがかけられているということである。王門に飾られている6人のイコンは、上段がマタイとルカ、中段がガウリイルとマリヤ、下段がマルコとヨハネの順に飾られている。この部分は、特に厳しく配置が決められているわけではないようで、このように『四福音記者』が上下に分かれて飾られる場合はちらほらあるということ、盛教会の事務局をなさっている伊勢氏はおっしゃっていた。

実際に、石巻教会で田端司祭に聞いたところによれば、イコノスタスのイコンは掛け替えが自由に行われるものだそうだ。聖堂を新しくした際に古いイコンを新しいイコンに変えることもあるし、その教会に合った主題のイコンに掛け替えることもあるそうだ。イコン自体を掛け替えることが厳しく制限されていないということならば、王門にかけるといった基本的な定位置を逸脱しなければ、配置が多少変わっても問題にはしないのだろう。

## 5.一関教会

一関教会のイコノスタスのイコンの配置は以下の図を参照。

至聖三者		①		主の洗礼	
三聖人※	⑥※	②		⑤※	不明※
		③	④		
		②			

一関教会のイコノスタスは、それほど大きくなく、横幅が狭い。これは、聖堂移転の際にイコノスタスが入りきらず、両端のイコンを外したのではないかと小池神父がおっしゃっていた。上段と王門に掛けているイコンが山下作のものである。全体を担当したのでないのかもしれないし、古くなったために今のイコンと掛け替えられた可能性も否定できない。

## 6.高清水教会

高清水教会のイコノスタスのイコンの配置は以下の図を参照。

		①						
ペトル・パウエル	⑦	⑥	②		⑤	⑧	顕栄祭	
			③	④				
			②					

高清水教会のイコノスタスは、両端の『ペトル・パウエル』と『顕栄祭』を除いて、盛教会のイコンの配置と同一である。高清水教会のイコンは、山下りん作のイコンの中でも比較的新しいものだということを田畑司祭からお聞きした。盛教会のものを含めて、北鹿会や盛岡教会よりも後の作品であることが分かる。絵のタッチも、北鹿ものよりは繊細でない感じがあり、山下の白内障が進行し始めた頃の作品ではな

いかと考えられる。

## 7.白河教会

白河教会のイコノスタスのイコンの配置は以下の図を参照。

				神父サワオフ※					
イコン 5 つ※				①		イコン 5 つ※			
預言者 エリヤ ※	三聖人 ※	⑦※	⑥	②※		⑤	⑧※	生神女 進堂※	授洗者 イオアン※
				③	④				
				②※					

白河教会のイコノスタスは、さまざまな大きさのイコンを寄せ集めて作ってある。基本的なイコンの配置は押さえているものの、作風の統一感はない。『預言者エリヤ』のイコンは、もともと上部分が半円形になっていてはみでるために後ろに折られている。また、『三聖人』のイコンは、幅が大きかったため聖人のぎりぎりのところまで左右が切り取られている。一つ一つのイコンはそれぞれ違った経緯を持って制作され、寄贈されたものであり、それを寄せ集めてイコノスタスを形成したことが白河教会のパンフレットに書かれている。山下は、イコノスタスを形成するのに不足しているイコンを制作したと推測できる。山下自身が設計者としてイコノスタス全体の配置を指示する場合は全てではなく、教会の状況に合わせて臨機応変に依頼に応じていたことがわかる。

最後に、この章のまとめとして東北7教会のイコノスタスの特徴を述べる。

岩谷堂教会はロシア製のイコノスタスであり、白河教会は様々なイコンを寄せ集めたイコノスタスであるため、ひとくくりに論じることはしない。他の5教会におけるイコノスタスにおけるイコンの配置を比較すると次のことがわかる。

盛岡教会を除く4教会は、一段組のイコノスタスである。イコノスタスにおけるイコンの基本的な配置の仕方はロシア正教と変わらない。ただし、ロシアにおけるイコノスタスというと、三段組以上のものが一般的だと思われるだろう。これに対して東北地方におけるイコノスタスは一段組のシンプルなものがほとんどで、高清水教会は枠に関しても装飾がほとんどない。この一段組のイコノスタスは東京復活大聖堂（ニコライ堂）のイコノスタスに倣ったかたちである。ただ倣ったというだけでなく、屋根が低い聖堂であるということと何段にもものぼるイコノスタスはコストがかかるということが原因にあると考えられる。北鹿教会に至っては、聖堂そのものがこじんまりとしており、イコノスタスは迫力があるというよりもびったりとその聖堂に収まっているという印象が強い。反対に盛岡教会は、他の3教会に比べて聖堂の天井が高く、比較的広い。このため、天井まで届くイコノスタスを作ろうとして三段組になったということが推測できる。コンパクトなイコノスタスは聖堂の狭さに起因している。

ちなみに、西日本の大阪教会や京都教会はロシアからの寄贈や輸入によるイコノスタスが使われている。こちらは、三段組で幅も東北のものより広く、東北地方のイコンと比べると壮大な印象を受ける。

写真1 大阪教会のイコン



写真2 京都教会のイコン



写真1は大阪教会のイコンである。聖堂自体が北鹿教会の聖堂の大きさと比べると倍以上といえるほどの高さがある。日本正教会のホームページによると、「イコンスタスは、モスクワの聖堂がシグリヤノフが制作したモスクワのクセニヤ、フェオドロブナ、コレスニコワ婦人によって、四国の松山正教会に献納されたが、東京を経て大阪教会に移設した由緒あるものだ」<sup>xi</sup>ということだ。

また、写真2は京都教会のイコンスタスである。ロシアに発注したとされるイコンスタスは、日本に着いてみれば聖堂の幅よりも大きく、端の方は折り曲げられている。山下は、この京都のイコンスタスのイコンを模写している時期もあったそうだ。日本正教会のホームページによると、1903年の成聖された当初は、京都正教女学校が教会敷地内に併設され、東京からナデジタ高橋五子(いね)が舎監として派遣されたそうだ。山下とも交流があったと現地の信徒の方が案内してくださった。

北鹿、盛岡、盛、高清水の4教会のイコンスタスは、枠も日本製であり、ロシアからの輸入や寄贈ではない。故・釜谷司祭によると、北鹿教会のイコンスタスの並びに関して山下りん自身が手紙によって配置場所を指示したことがわかっており、山下りんがイコンスタス全体のイコンを制作したのは北鹿教会が初めてであったと考えられるそうだ。他の教会に関しても同様に指示を出したかどうかは確定することができていないが、東京復活大聖堂のイコンスタスを踏襲したかたちを崩さなかったということがわかる。

## おわりに

本論文を書く目的として以下の三つを挙げた。

- ①山下りん作のイコンが東北地方に多い理由や背景を明らかにすること
- ②山下りん作のイコンが使用されているイコンスタスの特徴を明らかにすること
- ③現在東北地方に残っている山下りん作のイコンの記録を残すこと

①については、東北地方には農民が多く信徒の収入が少なかったという背景があり、経済的に困窮していたという理由から、ロシア製の高価なイコンをさらに運搬の費用をかけて運んでくるよりも、廉価で手に入る山下りん作のイコンが重宝されたということがわかった。ただし、各教会の草創期には経済的な基盤のある豪農や医師がいた教会が何箇所か見られる。そのため、その一人によって最初の基盤を作ることができたが、その後の宣教の対象が農民だったために、聖堂を新築するなどといったことになっても高価なものを調達する余裕はなかったのではないかと考えられる。

②については、イコノスタスにおける基本的なアイコンの配置はロシア正教のものとは変わらないものの規模の大きさの違いやイコノスタスの枠がどのように入手されたかによって多少の違いがみられるということがわかった。イコノスタスのアイコンの全てが山下りんの作である北鹿教会では、イコノスタスにおけるアイコンの配置まで山下りんが指示したということが神父への聞き取り調査から分かっている。そして、その配置はロシアのイコノスタスと基本的には同じであるが、北鹿教会の小さな聖堂に合わせて段が縦にいくつも続いているわけではなく、一段に収められている。この一段に収められている形は他の教会でも見られる。東北地方のイコノスタスの中では、最高でも三段までのイコノスタスしか存在していない。

③については資料編を参照。しかし、今回の調査で完全に作品を網羅することはできなかった。その理由として、筆者自身が女性であるため至聖所内のアイコンを見ることができなかった教会があること、日本ハリストス正教会のホームページに掲載されている所蔵教会一覧を参考にして訪問・調査を行なったが、そこに全ての教会が網羅されているわけではなかったこと、個人が所有しているアイコンについては調査対象にしなかったことがあげられる。さらに考えられることは、アイコンはサインを書くなどして制作者が特定されるものではないため、山下りんが描いたものであるにもかかわらずそうではないと判断されている場合もありうるということだ。ただし、全体像をつかむ際に参考になる記録は残せたのではないかと考えている。

今後の課題として、山下りん作のアイコンが所蔵されていることが調査中に確認された、中新田ハリストス正教会に対する調査を行うことがあげられるだろう。また、個人が所有している山下りん作のアイコンについては本論文では取り扱わなかったもので、それについて調査することでより詳細な山下りん作のアイコンの所蔵や経緯を明らかにすることができるのではないだろうか。さらに、本論文では東北地方に限定して山下りん作のアイコンについて調査した。しかし、山下りん作のアイコンは全国各地に所蔵されているため、全国各地の山下りん作のアイコンがどのような経緯でその地に残されるようになったかを調査することによって、新たな発見があることが期待される。

## 謝辞

本論文の調査にあたって、各地の教会を訪問する中で様々な方にお世話になりました。東北地方の正教会は農村部にありところが多く、公共交通機関で訪ねるには苦勞する教会もあり、そのような土地の教会を訪問する際には神父様やその奥様が車を出してくださいました。そして、研究に生かせるならと様々な資料を見させてくださり、失礼な質問に対しても丁寧に返答してくださいました教会関係者の皆様に心から感謝します。

北鹿教会を以前管轄されていた、故・釜屋幹雄神父には体調がすぐれない中わざわざ聖堂の鍵を開けに出向いてくださり、無知な自分に分かりやすくお話ししてくださいましたことに本当に感謝しています。また、東北地方の教会を管轄しておられた、一関の小池神父、盛岡の水口神父、石巻の田畑神父には幾度か各地の教会を訪問する際にお会いしお話を聞かせて頂きました。お忙しい中、予定を調節してください感謝いたします。また、神父様のご不在の際に対応してくださいました奥様方や、温かく案内してくださいました各教会の信徒の皆様にも感謝の思いを表したいと思います。さらに、京都、大阪、徳島のハリストス正教会の方々は、突然の訪問にも関わらず様々な配慮をして頂き、本論文に新たな視点を加えるきっかけをくださいま

した。山下りん記念館である「白凜居」を管理され、訪問した際にお話を聞かせて頂いた柳澤さんには、一関教会の訪問の際に再会を果たしお礼を述べる事ができ、嬉しく思います。

山下りん研究の先達であられる東北学院大学鐸木道剛教授には、貴重な資料を拝見させていただいた上、ご助言をいただき感謝いたします。また、ご指導いただいた本学相沢直樹教授に心から感謝いたします。本論文の執筆に様々な形でご協力いただいた全ての方々に感謝の思いが尽きません。本当にありがとうございました。

## 参考文献・参考ウェブサイト

### 1.山下りんについて

大下智一（2004）『山下りん——明治を生きたイコン画家』（ミュージアム新書 24），北海道新聞社。  
鐸木道剛（2013）『山下りん研究』岡山大学文学部。  
鐸木道剛監修（1998）『山下りんとその時代展』読売新聞社・美術館連絡協議会。

### 2.ハリストス正教会について

池田雅史（2012）『ニコライ堂と日本の正教聖堂』（ユーラシア・ブックレット No.177），東洋書店。  
長縄光男（2011）『ニコライ堂小史』（ユーラシア・ブックレット No.169），東洋書店。

### 3.イコンについて他

川端香男里他監修（2014）『〔新版〕ロシアを知る事典』平凡社。  
高橋保行（2003）『イコンのこころ（新装版）』春秋社。

### 4.正教新報

「正教新報」第1号，愛々社，明治13年12月15日発刊。  
「正教新報」第45号，愛々社，明治15年10月15日発刊。  
「正教新報」第53号，愛々社，明治16年2月15日発刊。  
「正教新報」第59号，愛々社，明治16年5月15日発刊。  
「正教新報」第71号，愛々社，明治16年11月15日発刊。  
「正教新報」第108号，愛々社，明治18年2月15日発刊。

### 5.パンフレット

北鹿ハリストス正教会パンフレット  
白河ハリストス正教会パンフレット

### 6.ウェブページ

日本正教会ホームページ「石巻ハリストス正教会・聖使徒イオアン聖堂」  
(<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-ishinomeki.html>) (2015/12/21 アクセス)



日本正教会ホームページ「一関ハリストス正教会・昇天聖堂」  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-ichinoseki.html>〉 (2015/11/02 アクセス)

日本正教会ホームページ「岩谷堂ハリストス正教会・主の降誕聖堂」  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-iwayadou.html>〉 (2016/01/18 アクセス)

日本正教会ホームページ「大阪ハリストス正教会・生神女庇護聖堂」  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/n-osaka.html>〉 (2016/12/07 アクセス)

日本正教会ホームページ「金成ハリストス正教会・聖使徒イオアン聖堂」  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-kannari.html>〉

日本正教会ホームページ「盛ハリストス正教会・昇天聖堂」 (2016/01/18 アクセス)  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-sakari.html>〉 (2015/12/07 アクセス)

日本正教会ホームページ「上下堤ハリストス正教会・生神女庇護聖堂」  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-jougedutsumi.html>〉 (2015/12/21 アクセス)

日本正教会ホームページ「仙台ハリストス正教会・生神女福音聖堂」  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-sendai.html>〉 (2016/10/17 アクセス)

日本正教会ホームページ「高清水ハリストス正教会・主の顕栄聖堂」  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-takashimizu.html>〉 (2015/11/16 アクセス)

日本正教会ホームページ「中新田ハリストス正教会・主の洗礼聖堂」  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-nakaniida.html>〉 (2016/10/17 アクセス)

日本正教会ホームページ「盛岡ハリストス正教会・聖十字架挙栄聖堂」  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-morioka.html>〉 (2015/12/07 アクセス)

日本正教会ホームページ「山下りん聖像所蔵教会一覧表」  
 〈<http://www.orthodoxjapan.jp/seizou.html>〉 (2016/10/17 アクセス)

北鹿ハリストス正教会生神女福音会堂ホームページ「変遷」  
 〈<http://wp-honest.com/magata/hennsenn-3.html>〉 (2015/10/19 アクセス)

第 2 回 古典絵画技法研究会模写展ホームページ「田中智恵子 (たなか ちえこ)」  
 〈<http://omotesando-garo.com/link.13/mosya.html>〉 (2015/11/16 アクセス)

---

i 日本正教会ホームページ「山下りん聖像所蔵教会一覧表」

〈<http://www.orthodoxjapan.jp/seizou.html>〉 (2016/10/17 アクセス)

ii イコンは教会が所持する貴重品という扱いではなく、あくまでも信仰の道具として使用されている印象を受ける。ロシア製の七宝で飾り付けられた額に入っているような高価なイコンなどの場合は貴重品として扱われているような雰囲気はあるが、大体はイコンを道具として扱い、古くなれば新しくするのが一般的に行われているようだ。よって、特にイコンの所在を記録するような習慣があるわけではない。

iii 長縄光男 (2011) 『ニコライ堂小史』 (ユーラシア・ブックレット No.169), 東洋書店, 16 頁。

iv イコノスタスの写真は以下の URL より転載

<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-takashimizu.html>

v 写真は以下の URL より転載 <http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-nakaniida.html>

vi 写真は以下の URL より転載 <http://www.orthodoxjapan.jp/annai/h-sendai.html>

vii イコノスタス以外に所蔵されている 1 点は、神父によると、山下りん作ではない可能性が大きい。

---

しかし、今回は数に含めた。

viii 二点の山下りん作イコンが所蔵されていることが、ウラジオストクで開催された山下りんの展覧会に出品されていることから推測されるが、日本正教会ホームページには記載なし。

ix 日本正教会のホームページによれば2点の所蔵があるはずだが、現地に訪問した際に確認できず。

x 参考：高橋保行（2003）『イコンのこころ〈新装版〉』春秋社，96頁。

xi 日本正教会ホームページ「大阪ハリストス正教会・生神女庇護聖堂」  
(<http://www.orthodoxjapan.jp/annai/n-osaka.html>) (2016/12/07 アクセス)